
ヘンゼルと迷いみこ

絢無晴蘿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘンゼルと迷いみこ

【Nコード】

N4015BA

【作者名】

絢無晴蘿

【あらすじ】

みなさん、世の中って不思議なことが沢山ありますよね？
そうなんです。

わたし、いまとっても不思議なんです。
え？

話がよくわからない？
私もわからないんです。
なぜか私、記憶喪失で生き霊になっていました。

「ようこそ、ジャック・オ・ランタンに」

ジャックとキャンディー

第一話

ジャックとキャンディー

みなさん、世の中って不思議なことが沢山ありますよね？
そうなんです。

わたし、いまとっても不思議なんです。
え？

話がよくわからない？

私もわからないんです。

なぜか私、男の子の前に立っていました。

「ようこそ、ジャック・オ・ランタンに」

本や小物、筆記具や紙、そのほか様々な物が置かれて雑多な机に肘を置いて、少年は私の方を見て言いました。

綺麗なオレンジ色の髪には、なぜか女の子がつけるようなピンがつけられています。

そして、真っ黒なコートを着ていました。

まあ、家の中でコートなんて、暑くないのかしら？

「あら、ここはどこなんでしょう」

どこかの部屋のようです。

少年の座った後ろの壁には、古びた本がほこりをかぶって積み上げられていました。

まあ、ずいぶん汚い事っ！

掃除していいのでしょうか？

「随分戸惑っているようですね。しかし、大丈夫ですよ。みなさん、最初は戸惑うものですから」

「そうですか？私としては、この部屋の汚さが気になって気になって……あぁっ、水で流してしまいたいっ!!」

するととつぜん、少年は不機嫌そうな顔をしました。

「あんた、だれ？てかオレ、お前に話してないから。ほら、そこじやま」

「あら？」

後ろを向くと、私の姿に気づいていないのか、やつれたお父さんのような男の人が、少年の前に歩いて来るところでした。

思わず、少年の前をその人に譲って上げます。

まあ、私って優しい人。

「もうしわけない。私はどうしてここにいるのだろうか」

おやまあ、この人もどうしてここにいるのか分からないようです。

「大丈夫ですよ。では、最初の違和感を話してもらいましょうか？」

男の人は、驚いたようです。

「なぜそれをつ」

「ここに来る人は、大抵そうですから」

「……」

どういう事なのでしょう？

男の人は、つらそうに言いました。

「おかしいんです。妻も、娘を、私の事を無視するんです。突然」

「そうでしょうね。それで？」

「なぜか、私の前で泣くんです。みんな、私を見て泣くのです」

「……」

「わからないんです。どうしてっ、どうしてっ……どうして、私はここにいますか？」

「それは、あなたの魂が道に迷ってしまったからです。あなたの目の前にある、黄泉路に至る道に気づいていないからです」

そういつて、男の子は立ちあがりました。

「あなたは、もう死んでいるのです」

そう言うと、男の人は、ぼうぜん顔を上げました。

「なにを言っているんですか？」

「あなたは、もう生きている唯人には視えない存在なのです。魂だけで、彷徨っているのです。自分が死んだことに気づかず。自分が逝くべき道も知らず」

「……」

「でも、もう見えるでしょう？ あなたの前に広がる道が」

「……そう、ですね。嗚呼、私は……そうか、そうだったのか。すまない。お前たちだけを残して……」

そう言うと、男の人は消えてしまいました。

呆気なく、消えてしまいました。

本当に、呆気なく。

「あら……」

あの方は、死者？

「さてと。で、あんた誰？」

「あらあら。私は……さあ、誰でしょう？」

「ふざけてんのか？」

「いや、ふざけてないわ。あら、でも、あなたは誰ですか？」

男の子は、思いつきり嫌そうに顔を見ました。

「オレの名前は、ジャックだ」

ジャック君、ジャック君。

よし、覚えてたわ！

「なるほど。ところで、スパロウ君。ここはどこなのかしら？」

「オレの問いに答える気あるのか。あと、オレの名前はジャックだ」

「そんなに眉間にしわを寄せていると、ザビエル禿げになってしまいますよ？」

あら大変。

ザビエル禿げは、一部の人に人気はあるけど、一部の人にはうざがれてしまうわ！

若いのに、なんて大変なことなんでしょう。
苦勞しているのね。

「な、なんでそんな事になる!!」

「おかしいかしら?」

「おかしい!!」

この人はきつと、ザビエル禿げが嫌いな人なのね。

「ところで、先ほどの男の人は、どうして消えたのかしら?」

「……死んだことを自覚したから、行くべき所に逝ったんだよ」
「まあ」

あの人は、やっぱり死んだ人だったの。

「で、お前、名前と、なんでここにいいのか答えろ」

「名前……じゃあ、私の名前はキャンディーよ」

「じゃあ?」

「そう。あとね、間違ってもキャラットって言わないでね。私、ニンジン嫌いなよ。あ、でも飴も嫌いだわ。どうしましょう」

「つつこみどころがありすぎて、どこに突っ込んだらいいのか分からない」

「それは、大変ね」

「……」

あら、なんで黙ってしまったのかしら。

「お前、霊だって自覚ある?」

「あら?」

何を言い出すのかしら。

「生き霊だって、自覚あるのか?」

「いき、りょう?」

なるほど。

「だから通り抜けができるのね! すごい、すごいわ、私!!」
「……えつと、あつと……なんだって言うんだ、この人??」

こうして私、キャンディーと、ジャックは出逢ったのです。

登場人物

ジャック・オ・ランタン
主人公

キャンディー

語り手

ジャックとキャンディー（後書き）

ジャックとキャンディーの物語。

ちよっとした長編になりますが、よければお付き合いください。

裏一話 ジャックとシンデレラ

裏一話

ジャックとシンデレラ

ここは、行くべき所に逝けない霊達が、最終的に辿り着く館、

ジャック・オ・ランタン

そこで、オレンジ色の髪で片目を隠した少年が、霊達を出迎える。

ジャックが目を開けると、そこには少年が立っていた。

「あれ？」

「ようこそ、ジャック・オ・ランタンへ」

「……」

緑色の髪に、灰色の瞳の少年。

彼はまじまじとジャックを見ると、笑いだす。

「うわっ、本当にジャック・オ・ランタン？ あ、ボク死んだの？」

「いやだなあ。ほんと、笑っちゃう！」

「は？」

なんだ、こいつ。

そう、ジャックが思ったのも、仕方ないことだった。

「ボク、アルトって言うんだ。君は？」

「……ジャック」

「へー。ジャック……ジャック・オ・ランタンのジャック？ そのまんま！」

「……意外だな。若いのに、オレ達の事知ってんのか？」

「うん。まさか、本当にいるとは思ってもいなかったけど。あつ、ムラサキに教えたら喜ぶかも！……あ……」

馬鹿騒ぎをしていたというのに、突然黙りこんでしまった。

「ボク、死んじゃったんだ……」

「……」

この館に来る者は、大抵は死者だ。

彼も、死者だ。

死者は生者と会う事は出来ない。

「死んだって事を自覚しているのなら、あなたの前に広がる道が見えますよね？」

「……そう、だね」

「……」

「……」

少年は、困ったように笑う。

「でも、まだ逝けないや」

微かな、哀しみを伴う笑顔だった。

「そうですか」

「止めないの？」

「あなたのような人は、ときどきいますから」

「そっか」

時々、迷ってこの館に辿り着き、死んだとわかっててもなお、逝かない人もいる。

「ボク、約束したんだ」

「？」

「死なないって」

しかし、彼は死んでしまった。

「約束破って、死んじゃった。……だから、せめて……まだ、逝きたくない」

そう、彼は笑うと、ジャックに背を向ける。

「なるほど……まあ、いいんじゃないのかな」

そう、彼の背中に言葉を贈った。

「ボク、あの子を残して逝けないから」

そう言つて、彼は消えてしまった。

たぶん、その、『あの子』の元へ。

「ああいう奴らばっかりだったら、良いんだけどな……」

こっちの説明も無く自分で死んだことに気づいたり、きちんと理解して死を受け入れたり。

説明の手間も、説得とかも、しなくていい。

それを、出来ない人もいる。

死んでいる事に気づかない、死を受け入れない、理解できない。

そんな人々は、どうなってしまうのか？

「憂鬱だ」

そんな彼等は、もはや死者ではない。

そして、それを狩るのが、ジャック・オ・ランタンの仕事……。

館の扉が叩かれた。

黒マントで姿を隠した男が館に入ってきた。

「……仕事だ」

それだけ言つと、また外へ行ってしまう。

「了解」

そう言つと、急いでその後を追った。

追加登場人物

アルト

人待ち

ジャックとフェリス

第二話

ジャックとフェリス

みなさん、わたし思うんです。

窓から差し込む光。

その光できらきら光る……ほこり。

この部屋って、汚い！！

「もう、掃除しようよ、掃除！！」

「あー、もう。うっさい！だまつてろ！！」

「ほこりだらけですよー。ハウスタストですよー。ハウスタストが舞いあがるっ！！」

「……なにしたいんだ」

「掃除して欲しいんです」

私の名前は、たぶんキャンディーー。

たぶんってつくのは、私が私の名前を忘れちゃったからのよ。

そして、掃除嫌いな男の子は、ジャック君。

この子は、ザビエル禿げ候補の可哀想な男の子です。

ちなみに、彼は迷ってしまった魂を天国に送るのがお仕事のようにです。

そして、私は実は……。

「何もできない生き霊が、オレに指図すんなっ！」

「まあ、キャンディーー怒りました！！」

そうなんです。

私、生き霊みたいなんです。

おかげさまで、物には触れず、物体透過し、普通の人には姿を見られません。

しかし、ジャック君のような見える人には、見えるようです。

「だいたい、なんでここにいるんだよ！」

「私の家はどこですか？」

「知るかつー！」

「この迷える私を導いてくださいな。そして、私はジャック君以外を知らないのです。もう、ジャック君しか頼れる人がいないのです」

「ああー聞こえない聞こえない。ほら、そろそろ客が来るから、さつさと消えろ！」

「きゃうん」

まあ、酷い人。

私はどうしてか飛ばされて、部屋の隅にぐしゃりと倒れてしまいました。

そして、ジャック君は痛いけな私に目もくれず、お客様に言うのです。

「ようこそ、ジャック・オ・ランタンに」

「む、ここは何処だ」

そう言ったのは、凛々しい女性の騎士様。

純白の鎧の姫騎士様のようです。

まあ、すてき。

「ここは、ジャック・オ・ランタンですよ」

「ふむ。珍妙な場所だな。しかし、私は行かなくてはいけないところがあるのだ」

「どこにですか？」

「どこに……」

おや、お加減がよろしくないご様子。

突然顔を真っ青にしまいました。

「私は……そ、そうだ！ 私は部下達を助けなければ。私が居ないというのに、彼等は皆残って必死に戦っているのだー！」

「どこに部下達はいるのですか？」

「関係ないっ、早く、彼等の元に行かなければっ」

ジャック君は、呆れたようにため息をつきます。

「なら、質問を変えましょう。なぜあなたは、部下達から離れたのですか？」

「それは……」

あらあら、どんどん真っ白になっていきます。

やっぱり、風邪なのかしら？

「それ、は……」

突然、ジャック君は近くにあった大きな機械をいじり始めました。ぴっぴっぴ、と、軽快な電子音が響きます。

その間、姫騎士さん（仮名）は、何かを考え込むように下を向いていました。

「なるほど。思い出せないようなので、オレから言いましょう。あなたは、前線を離れなければいけないほどの、大けがを負った。だから、部下達から離れた」

「そ、そう、だ。だがっ」

「しかし、爆破の直撃を受けたあなたは、治療のかいなく、死亡」

「な、なにを言っているのだっ」

「だから、あなたは今、自分がだれで、部下が誰で、何処で戦っていたのかも何も、思い出せない」

「……ちがっ」

「もう、あなたは死んでいるんですよ」

あら。

この姫騎士さんもそうなのね。

でも、姫騎士さんは受け容れられないご様子。

まあ、突然死んでいるなんて言われたら、誰でも吃驚しちゃうわよね。

「うそだっ。そんな事、嘘に決まっている！！あいつらは、私を待っているのだ！」

「……もう、戦いは終わりましたよ」
「なっ」

「数年前に、あなたが最期に戦った戦いは、終わりました」
そう言えば、四年ほど前に大きな戦いが終わりました。

百年も続いた大きな戦い……。

この姫騎士さんも、その戦いで剣を取って戦った一人みたいです。
「そん なっ」

「そして、勝ったのは……」

「ど、どっちなのだ。フェリスか、レンデルか」
「フェリス」

あら？

「そう、か……」

「もう、あなたの目の前に広がる道は、見えていますよね？」

「……私は、あの時……でも……まだ仲間と共に戦いたかった。祖国を、守り、たかった……」

「大丈夫、貴女の仲間は戦い抜き、祖国は守られました」

「そう、なら……もう思い残すことはない」

「……」

姫騎士は、そう笑って消えてしまいました。

静寂が、訪れました。

「なぜ、嘘をついたのです？」

「うそ？」

「フェリス皇国は、レンデル帝国に侵略されて、消えてしまったっ
はずですよ？」

フェリスを侵略したレンデル帝国は、その後も侵略を続けました。
そして、いくつもの国が消えてしまったのです。

「そう言った方がいいからだよ。てか、そういう記憶はあるのか」
「……」

どちらにせよ、彼女は天国に逝ってしまいました。

彼女は、ジャックの言った嘘で救われたのかもしれませんが。

「で、いつまでここにいてるつもりだ」

「何時まで？ さあ、何時まででしょうか？」

「さっさと、どっかいけっ！！」

「何処つて、何処ですか？」

「知るかつ！！」

私はまだ知らなかったのです。

なぜ、私はここにいるのか。

なぜ、ジャック君はここにいるのか。

そして…… 舞い散る埃は、部屋はいつきれいに掃除されるのか。

あつ、ここ、重要ですよ！！

ジャックとレガート・レント

第三話

ジャックとレガート・レント

私がジャックの前に現れてから、数日。
すごく、疑問があるんです。
なについて、それはもちろん……

「どうしてジャック君はキッチンがあるのに何も作らないんですか？」

「は？」

そうです。

ジャック君は、何も食べていないんです！

人間、食べなくても十日は生きていられるとかいいますが、キャンデーは心配です。

「だってオレ、人間じゃないから」

「……」

「……？」

「まあ、そうだったのですか？」

「いや、気づけよ！！」

まあ、ジャック君は人間ではなかったのですか！
すっかり、人間だと思っていました！

あつ、まさか、私も実は人間では無いパターンとかではありませんよね？！

「私は、人間でしょうか！」

「人間だろ」

「まあ、そうですね?」

よかったよかった。

あら?

よかったのかしら?

まあ、いいや。

そんな時です。

初めて——そう、初めてなんです!

この家の玄関が、ノックされました!!

まあ、この玄関、どこかに繋がっていたんですか。

すっかり飾りと思っていました。

この家に来る人は、大抵幽霊さんばかりなもので。

ジャック君には生きている人間のともだちがいないのかと思っちゃいました!

「はい」

「あ、おいつ!勝手にでんな!!」

「どうぞ」

「必礼しまーす……誰、あんた?!」

入って来たのは、どこか機械おたくそうな青年Aさん。

Aさんは、私をまじまじと見た後、なぜか扉を閉めました。

「家、間違いました」

「間違つてない! レント! 間違つてないから!!」

そう言つと、勢いよく扉を開けて、青年Aさんはジャックの元に走りました。

「お、おう、ジャック。なんだ、この人は?!まさか……コレか?」

何やら手元を隠しながら話してます。

「んな訳ねえだろ!!」

「はじめまして、お嬢さん。私はレガート・レント。しがない情報屋です」

「切り替え早っ!」

「まあ、情報屋さん?」

「おい、レント。かつてに」

「この馬鹿ばうずの相手は大変でしょう？」

「いえいえ。あ、私の名前はキャンディーと言いますの。今後とも、うちのジャックをお願いします」

「うちのジャック？ オレをお前の物にするな！！」

「はい。今後ともごひーきにさせてもらいます」

「こっちの話を聞け！」

「大丈夫だ、聞いている。ただ、聞き流しているだけだ」
「……」

まあ、レガート・レントさんってば、ジャック君を言いくるめてしまいました。

面白いですね。

わたしも見習って今度やってみましょう。

想像して見ると……あら、楽しそうだわ！

今からるるんです。

「で、何で来たんだよ」

「ああ、いつもの定期健診だ」

「ジャック君はどこか悪いんですか？」

「いや、違う。これだよこれ」

「？」

なぜか、レガート・レントさんは機械を調べ始めました。

このまえ、姫騎士さんが来た時ジャック君が使っていたあれです。

「ときどき、こうやって壊れてないかメンテナンスすんの」

「まあ、大変ですね」

「いや、機械は好きだから」

ほほう。機械おたくと見た私の初見は間違っていなかったわ。

「一応、情報屋やってるんで、よければどうぞ」

「はい？」

渡されたのは小さな名刺。

黒い不思議な名刺です。

でも、幽霊の私には、触る事も受け取る事も出来ません。
再びザンネン……。

「情報屋さん……では、私は誰なのか分かります？」

「え？」

「そいつ、記憶喪失でどこの誰だかわからないんだ。なんでかうちに居座るし、どうにかしてくれ」

「今すぐには思い当たらないな……お嬢は分かるか？」

「？」

誰かに、話しかけますが、そこには誰もいません。

ジャック君は馴れているようで、何も突っ込まないようです。

「そう。ありがとう。お嬢。すまないな。すまん。わからないな」

「そうですか……」

ザンネン。

運命の女神はほほ笑みませんでした。

「てか、そいつ引き取ってくれ。仕事のじゃまだし」

「ええっ！ジャック君、酷いっ！！」

「今無理。旦那にちよっとお荷物預かってんの」

「っち……」

「もう、ジャック君酷いです！！」

ジャック君ったら、私が邪魔？

もう、酷いです！

もう、さみしくつてもかまってあげません！

「一応調べておくよ」

「まあ、お願いします」

それに対して、レガート・レントさんは良い人です。

そうしている内に、レガート・レントさんは帰って行きました。

「結局、お前はここにいんのかよ」

「はいっ」

「どこの誰だかわかったら、とつとと出て行けよ」

「はい……っはー！　その発言は分からないうちはここにいてもいいって事ですねー！」
「っー！」

しまった！顔のジャック君に、思わずしてやったりと思ったのでした。

追加登場人物

レガート・レント
お手伝い

P a n d o r a b o x イトコヒメシステム
お嬢

ジャックとアルト

第四話

ジャックとアルト

わたしは、こう思いました。
世界には、いろんな人がいるもんだなと。

「ねねね、君なんて言うの？ ジャックの友達？ 生き霊みたいだけど?!」

諦め顔で、ため息をつくジャック君。

その前では、緑がかった黒髪で灰色の瞳の少年がワクテカと私に質問をして来るのでした。

「私はキャンディーって言うの。ジャック君の保護者よ」

「なんでだ!!」

つつこんでくるジャック君は、もちろん無視。

もう、恥ずかしがり屋なんだから。

「そうか、ジャックの保護者だったのか」

「おまえら……」

ジャック君を見ると、何やらあきれ顔で額に手をつけていました。

「ボクは、アルト!」

「よろしく」

「……なんで、オレの周りにゃ話を聞かんやつが多いんだ」
しようです。

「くそっ」

「もう、怒ってばかりだと、玉砕クンみたいに将来ハゲ確定くんになっちゃうぞ!」

「まあ、大変! ところで、玉砕クンってだれですか?」

「玉碎クンは玉碎クン」

「まあ、そうなのですか」

「だ、ま、れ」

ジャック君は、友達が二人はいるようです。

毎日ひきこもり状態の自宅警備員だったのでとても心配だったのですが、心配なかったようです。

「ところで、キャンディーはどうしてここにいの？」

「はい。それは話すも涙、聞くと涙の大激闘の末――」

「嘘をでっちあげるな」

「はい。ちよつと私、記憶喪失になってしまったのです」

「へー……」

なぜか、考え込むアルト君。

どうしたんでしょうか？

「キャンディーっていうんだよね」

「はい」

「そっか……」

「？」

「ちよつと、ジャック。かむかむ」

「は？」

なぜか、二人はひそひそ声でお話。

まあ、私は仲間外れ？

「ひどいわ」

もう、失礼しちゃう！

「おい、ジャック……気を付けろよ」

アルトは、キャンディーに聞こえないように小さな声で囁いた。

「は？」

意味がわからんと睨みつけると、アルトは真顔で言った。

「あの子……やばいぞ」

「お前、知ってんのか？」

「知ってる。てか、君、ボクの職業知らんでしょ」
「知るか」

「まあ、とりあえず、忠告はしとく。彼女は別に大丈夫。でも、後ろにいる奴らは強硬手段で来るかもしれんやつらばかりだから…
…まあ、がんばれ」

「は？」

「じゃ、ボク帰るね」

そんなジャックの言葉に応じることなく、アルトは少し離れた場所にいたキャンディーの元へ行ってしまう。

「は？　ちよつとまでよ」

「お、おいつ、どういう意味か言って行け！！」

「ヤダ」。ばいばい、キャンディー！　また、遊びに来るから」

「はい！　さようなら」

「くんじゃねえよ！　迷惑だ！！」

アルト君はからからと笑うと、姿を消してしまいました。
それにしても、一体何を話していたのかしら。

「どうしたのです？」

「い、いや……」

おかしなジャック君。

なぜか顔をそむけて、そう言う奥の部屋へと行ってしまいました。

「まあ……」

初めて、ジャック君が動きました。

はい、初めてです。

この部屋から一步も動かなかったのに、びっくりです。

そう、快拳です。

でも一体どうしたんでしょうか？

「あ、入ってくんなよ」

「はい」

どさくさにまぎれて入ろうと思っていたのに、事前に気づかれまして。

無念……。

でも、ほんとうにどうしたのでしょうか。

ちよっと、心配です。

そんな感じで、今日も平和に一日は終わりました。

裏二話 ジャックとジャック

裏二話

ジャックとジャック

先輩の後を追って扉をくぐると、いつもの町では無くどこか寂れた墓地に出た。

先輩は、奥へと足を進める。

それを追っていくと、声が聞こえた。

叫び声にも似た、誰かの声。

思わず足を止めて、その声を聞こうと耳をすませる。

しかし、また聞こえる事はなかった。

「聞こえたのか」

「はい」

「今のが……目標だ」

「……」

今の声が、今回消滅させる魂。

「行くぞ」

暗い墓地を二人は行く。

墓地は荒れて、雑草が茂っていた。

墓石も所々ひびが割れて壊れ、中には倒れている物まであった。

ジャックは、先輩を見上げて聞く。

「ここか？」

「ああ」

「……」

「来るぞ」

風が吹いた。

思わず目を閉じた。

そして、目を開けた時には、黒い影がいた。

墓石のまわりを、めぐり続ける影。

それが、幾つも現れる。

「ああなった死者は、もう助からない。オレ等が助けなければ」

ジャックが手を差し出すと、死神の持つような鎌が現れる。

しかし、その色は純白の白。

それが一瞬にして変形し、短剣になった。

先輩も、いつの間にか長剣を持って臨戦態勢になっていた。

黒い影が、動く。

「いくぞ」

「了解」

白い一閃。

先輩は、黒い影を切り裂いた。

一瞬揺らめいた姿は、霧のように消えて行く。

「まだだ」

気を抜きそうになったジャックに、先輩は叫んだ。

黒い影が、晒う。

小さな墓場のそこかしこから、黒い影がわき出す。

「これが、逝けなかった者たちの姿だ」

その姿を、ようやく視認した。

黒く染まった黒い影の本当の姿。

それを見て、思わず手を止める。

彼等は、死者だ。

死んだことに気づけず狂ってしまった者。

死んだことを受け入れられず生に執着する者。

死ぬことを許せず、生者を呪う者。

様々な理由で、逝けなかった者達の集合体だった。

「……」

それを憐れみながら、一揆に斬り裂いた。

迷った死者を導く事。

死んだ後に行くべき所に逝けなかった者達を、逝く事の出来ない者たちを、行く事を拒む者達を、導くのがジャック・オ・ランタンの役目……。

「グレーテル……」

君は、今、何処にいる？

逝く死者を見送りながら、ジャックはそつと呟いた。

先輩

ジャックの先輩

キャンディーは町へ出かけました

第五話

キャンディーは町へ出かけました

家に閉じこもっているのは、体に悪い事です。
やっぱり、外に行かないと！

「と、言う事で、ジャック君。さあ、外へ行きましょう」
「は？」

もう、つまらないんです。
だって、来る日も来る日も、ジャック君は部屋に閉じこもってるんですよ？

幽霊さんと話す事もありますが、それだって一日に二三度あるかな
いかです。

もう、キャンディーは暇です。
つまらないです。

それに、最近気づいたのですが、部屋と部屋の壁はすり抜けられる
けど、外へは行けないんです。

つまり、ジャック君が誰かに玄関を開けてもらわないと外に行けない！

そんな私の思いも知らず、ジャック君はいつも通り座って幽霊さん
を待ってます。

「外に行きましょうよ。あ、そう言えば、この玄関はどこに繋が
ってんです？」

「なんでもいいだろ？」

「気になります」

「気にすんな」

まあ、酷い。

幽霊さんもいなくて暇なのに。

もう、こうなったら徹底的にいきますよ！

「気になります！」

「気にすんな」

「気になります！！」

「うるさい！」

「気になって木になります！」

「勝手になってる！」

「気になります気になります気になります！」

「黙ってる！！」

「……もう、暇人のくせに」

「……お前、オレを何だと思ってる」

「自宅警備員ですか？」

「ちげえよ！！」

はあはあ……お互い息を切らせての大げんかです。

それにしても、ジャック君、なかなか言いますね……。

しょうがない、最後の手です。

「……もしかしたら、外を見て記憶が戻ったりとか、したりしなかつたりするかもしれないのに……」

「……」

「……」

「……」

「……ああつ、もう！ わかった！ わかったから黙れ！！」

「ほんとですか？！」

キャンディーの、勝利です！！

ふふ、やったあ。

「ちよつと待ってる」

ため息をつきながら、ジャック君は何やら準備を始めました。

数分後――。

ジャック君は、いつもの真つ黒なコートを着てました。
準備するとか言ってたが、まったく変わってません。

……何を準備したのかしら？

「行つとくが、はしゃぐなよ。それと、たぶんお前、ふつうの人には視えないからな」

そう言えば、私生き霊なんでしたっけ？

霊って、ふつうの人には視えないそうです。

じゃあ。何をしても気づかれないのかしら？

「大丈夫ですよ。いたずらはしません」

「……するつもりだったのか」

「まあ、そんな細かいことは放っておいて、外へ行きましょう」

「はいはい……」

ため息をついたジャック君は、あきれ顔で玄関を開けました。
すると……明るい日差しが照っていました。

石畳の道が伸びていました。

そして、それと同じ石で出来た家がたくさん並んでいます。

ジャック君のお家は、その中でもとくに古い家でした。

小さな庭には、雑草が生え茂っています。

まあ、ジャック君ったら、きちんと除草してないのね。

「ところで、ここはどこです？」

「キルタタウン。シェイランドにある片田舎」

「キルタタウン？ シェイランド？ なんですか？ それ」

「こっちは知らねえのか。シェイランドって言うのは、中央大陸の南に位置する王国。そんでもってキルタタウンはさっき言った通り、シェイランドにある片田舎」

「そうなんですか……」

うーん、まったく知らないわ。

聞いた事も無い。

レンデル帝国とフェリス皇国の戦いとかは知ってたのに、どうして

かしら？

ま、そんな些細な事、忘れましょう。

だって、記憶喪失になってから、初めての外出ですもの。

「ところで、オススメの場所とかあるんですか？」

「は？」

「町案内してくださいよ」

「なんでオレが……」

なんてぶつくさ言いうけど、さすがジャック君！

うだうだ言いながら手を取ると、町の中心に向かってくれました。少しずつ、人が多くなっていきます。

「あら？ このへんは新しいのね」

石畳の色が、ある場所から変わっていました。

家も、どこか真新しい感じがします。

「この辺はな……」

「何かあったんです？」

「ほら、戦争があっただろ？ この辺はその時に大規模魔術に巻き込まれて壊れたんだ」

「なるほど」

シェイランドも戦いに巻き込まれていたのね。

この前の、フェリスの騎士さんを思い出しました。

彼女は、あの戦争で亡くなった人の一人。

きつと、この町でも沢山の方が亡くなったのでしょうか……。

なんだか、ちよつと切ないです。

戦争が終わって四年。

様々な所に、その影は在りました。

そんな戦争の中、私は何をしていたのでしょうか。

何処に住み、何処で生きていたのでしょうか。

「ところで、ジャック君……」

パツと横を見ると、誰もいません。

パツと反対側を見ると、ネコさんが歩いてました。

パツと後ろを見ると、知らない道が続いています。

「あら？」

ここは、何処なのかしら？

とりあえず、歩いてみる事にしましょう。

「まあ、初めてのお使いだわっ」

頼まれた物はないけれど、ちょっとわくわくです。

「あいつ……」

静かに、ジャックは怒っていた。

「……迷子になりやがった」

周りの目があるので、小さな声で文句を言う。

しかし、横を歩いていた人が少し胡乱げにジャックの事をちらりと見て歩き去った。

「……」

もう二度と外出何ぞするものか。

そう、固く誓ったジャックは辺りを搜索し始めた。

キャンディーは町で迷いました

第六話 キャンディーは町で迷いました

あらあら、私、今どこにいるのかしら？

角を曲がると、階段がありました。

そこを下りて進むと、噴水のある広場に出ます。

もちろん、ジャック君はいません。

それにしても面白いわ。

進むたびにどんどん道がわからなくなってくる。

「ジャック君はどこにいるのかしら。迷子になるなって自分で言うたのに、迷子になっちゃって」

噴水の周りをぐるぐる回って、考え事。

「あら、でもこれって私の方が迷子になったのかしら？」
ぐるぐる回っていると……め、目が回ってきます。

「うう、気持ちわるい……」

とりあえず、回るのは危険だわ。

ジャック君にも今度言っておきましょう。

「ふう。そろそろ行きましょうか」

何処へ行けばいいのか分からないけど、とりあえずジャック君を探しましょう。

思い立つたら即実行！

噴水の広場から、戻ってみます。

日は少しずつ傾いています。

日が落ちてしまう前に、ジャック君を探さないと大変だわ。
歩いていくうちに、町の風景は変わっていきます。

先ほどまできれいだった町並みが、どこか寂れてきます。

ああ、きつとこちらは古い町並みなのね。

そう言えば、ジャック君のお家も古い方でした。

と、言う事は、このへんにジャック君のお家があるのかも。

「あら、でも無理だわ……」

そう言えば、どんな家だったのか、覚えてない……。

とりあえず、歩いていきましょう。

そのうち、さっきまで町中だったのに、原っぱに出ていました。

周りを見ると、そこでは子どもたちが遊んでいます。

かけっこやかくれんぼ、いろいろな遊びをしていました。

よく見ていると、ジャック君くらいの子も遊んでいます。

「まあ、私も入れてもらおうかしら」

でも、残念。

そう言えば私、生き霊だったわ。

あの子たちとお話もできない。

「あら？」

そんな彼らを、私と同じように見ている男の子がいました。

近くの木に登って、そこから見ています。

まあ、木登りなんて出来るのね、すごいわ。

私、木登りなんてしたことないもの。

あら？

私、木登りしたことが無かったのね。

そんな事を考えながらその子を見ていると、その木に登っていた子が何かに気づきました。

勢いよく木から飛び降ります。

痛くないのかしら？

無事着地すると、こちらに向かって走ってきます。

「おねえちゃん、あそぼ」

「わたし……ですか？」

あらら？

この子、私が見えるみたいです。

「そうだよ」

その子は、そう言つて笑うと手を差し出しました。

「全然見つからねえ……」

町の中心にある教会の横で、ジャックは呟いた。

「くそ、あのばか……どこに行きやがったんだよ」

そう毒づきながらも、さすがに心配になってくる。

なにしろ、キャンディーは記憶喪失なのだ。

加えてあの性格。

自分に関する以外の事はいろいろ覚えていたみたいだが、シェイラ
ンドの事は知らなかったみたいだし。

「……あれ、使うか」

と、帰りかけて止まる。

そう言えば、この辺の道はいろいろ変わった。

昔はもつとごちゃごちゃしていたのだが、今はすっきりとしている。
知らない店が立ち並んでいる。

そう言えば、屋敷にこもってから数十年はこの辺まで来た事が無か
った気もする。

「……いやいやいや、そりやないだろ。まさか……オレ……」
迷った？

「……」

いろいろシヨックだ。

何十年も住んでる町で、迷うなんて……。

すでに、日は暮れ始めている。

とにかく、館に戻ろうと歩きはじめる。

「しょ、しょうがねえよな。だって、仕事だったんだし、外に出る
機会も無かったし」

自分でもよく意味のわからない言い訳をしながら道に行く。
そのうち、知っている道にでた。

館はこの近く。

ほっとしたジャックの前に、家路につく子どもたちが走ってきた。

「ほら、くらくなる前に帰らないと」

「えー」

「かあさんが怒るぞ」

「この前夕食ぬきって言われた」

「うそ。ひどい！」

「くらくなるとお化けがでるから、早く帰ってこいって」

「お化け？」

「お化けなんていないよ！」

「ほら、いこつ」

夕日に背を向けて走っていく。

「……お化け、ね」

彼等は気づいているだろうか？

今、擦れ違ったジャックが、化物だったことに。

「……」

ジャックは、無言で足を止めた。

「そつえば、あの辺の原っぱは探してなかったな……」

そう言っ、向かう先を少し変更した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4015ba/>

ヘンゼルと迷いみこ

2012年1月13日22時54分発行